法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-08-31

河原正博先生を送る〔含 略年譜・論著目 録〕

河上, 光一[他]

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
35
(開始ページ / Start Page)
73
(終了ページ / End Page)
83
(発行年 / Year)
1983-03-24

河

!原正博先生を送る

四月

同大学大学院に入学、和田清教授の指導

河原正博先生を送る

後も、大学院へは引き続きご出講いただくことになっております。 稀を迎えられましたが、お元気で研究を進められておられ、退任 年三月をもって定年退任されることになりました。河原先生は古 学史学会会長として、史学科のために足跡を残されましたが、本 今後も史学科のためご指導、ご鞭撻をお願いいたすしだいです。 介し、学恩に感謝の意を表したいと思います。 の学部・大学院の東洋史を担当される傍、主任教授、また法政大 れ、大学の発展のためご尽力下さったわけです。その間、史学科 生は実に三十五年の長きにわたって、わが法政大学に 在職 なさ 教授として、ご講義やご指導をいただきました。したがって、先 てご就任になされ、とくに同二十八年四月以降は、文学部史学科 次に先生のご経歴・ご業績を掲載し、さらにお人柄の一端を紹 河原正博先生は、 昭和二十三年四月、法政大学予科の教授とし

河原正博先生略年譜•論著目録

「略年譜」

昭和十五年三月 昭和十二年三月 浦和高等学校文科乙類卒業

大正元年八月十一 H 熊本県に誕生。 東京帝国大学文学部東洋史学科卒業。

> 昭和二十年四月 昭和十九年四月

昭和二十二年四月

昭和二十三年四月 六月

昭和二十四年四月

昭和三十五年五月 昭和二十八年四月

昭和四十一年四 月

昭和五十八年三月

南亜細亜文化研究所(所長白鳥清)

をうく(昭和十八年三月まで)。

文部省民族研究所助手。

国伝の研究助手。

東京帝国大学文学部における中国正史外

法政大学高等師範部 講師。

法政大学教養部教授。 法政大学予科教授。 兼任(課長は昭和二十八年三月まで)。 教養部学務課長を

横浜国立大学学芸学部非常勤講師(昭和 法政大学文学部教授。

三十七年十月まで)。

法政大学文学部教授定年退職。 法政大学大学院人文科学研究科教授。

論著目録

『宋名臣言行録』 上巻・中巻 岩波書店 昭和十九年・昭和二十

昭和四十

『ベトナム中国関係史』山川出版社 『東南アジアにおける権力構造の史的考察』竹村書店 四年 (山本達郎他十四名の共著)。 昭和五十年

「広西蛮酋の始遷祖について」『南亜細亜学報』2号 名の共著)。 (山本達郎他六 昭和十八

七四

宋初の水戦演習について」『和田清博士還曆記念東洋史論叢』 南漢劉氏祖先考」 『東洋学報』31巻4号 昭和二十三年。

「秦の始皇帝の嶺南経略」『法政大学文学部紀要』1号 昭和二

昭和二十六年。

「蛮酋の内徙について」『法政史学』7号 昭和三十年。

「Odorico の Panten 国に就いて」『史学雑誌』64の11号 昭和

優智高の反乱と交阯」『法政史学』12号 二月)。 て漢訳さる。 文は李榮村氏によって「儂智高的叛乱和交趾的関係」と題し 「国立編訳館刊」第一巻第四期、一九七二年十 昭和三十四年。(同論

「省地・省民の意味について」『和田清博士古稀記念東洋史論叢』 昭和三十六年。

「晋の戸調式の遠夷について」『鈴木俊教授還曆記念事洋史論叢』 「宋書州郡志に見える左郡左県の左の意味について」『法政史学』 14 号 昭和三十六年。

「晋の戸調式に関する一研究」 昭和三十九年。 『法政大学文学部紀要』 10 号 昭

「丁部領の即位年代について」『法政大学文学部紀要』15号 「宋代の殺人祭鬼について」『法政史学』19号 和四十年。 昭和四十二年。 昭

和四十五年。

(同論文は朱振明・鄒啓字氏により「丁部領即

て漢訳さる。 「東南亜資料」第45期、 |関于安南独立王朝成立年代的研究――と題し 雲南省歷史研究所東南

「宋初における中越関係」『法政大学文学部紀要』18号 **亜研究室刊印、一九八〇年)**

昭和四

「前黎朝と宋朝との関係」 「李順の乱に参加した旁戸について」『法政大学文学部紀要』 『法政史学』29号 昭和五十二年。 24

隋唐時代領南の強領馮氏と南海貿易」『山本達郎博士古稀記念 昭和五十四年。

隋代嶺南の奝領甯氏について」『法政史学』33号 東南アジア・インドの社会と文化』昭和五十五年。 昭和五十六

「象郡の位置について」『法政大学文学部紀要』 28 号 昭和五十

河 原 さ h لح 私

加 E 光

寡言、彫の深い哲学者然とした マスクと ともに、 勤厳にして 実 わたる長いお付合いである。 れから今日まで、中間に大きな断層があるけれど、凡そ半世紀に 入学当時の河原さんは、学生服を端正に着こなした、物静かで 河原さんとの出会いは、大学に入学した昭和十二年である。そ

た。直、近寄りがたい印象であった。畏敬の念を抱かせたものであっ

してである。実の兄貴ともいえるものであった。 ンクなどは河原さんに聞けば立ちどころに穴が埋まった。 方であることがはっきりしてきた。書取れなかったノートのブラ の中で、 義で顔を合せることになった。こうして生まれた親しいふれ合い 作成する結果となり、 て作成しなければならなかったから、誰もが同じような時間割を 面白そうな講義を拾い出し、 っていた。しかし卒論提出の条件や卒業に必要な単位数を勘案し 大学での講 正確な返事が返ってくるからである。しかも暖かな余韻を残 河原さんは勤厳実直な中に、極めて優しい思遣りのある 義 の時 間 特に第一年度は、 問割は、 学生がめいめいに作成することにな 各学科が発表する時 河原先生とも殆んどの講 間 表 0 # 親切丁 か 5

本や世界の大勢を冷静に正しく把握した。そしてその結果発せら から遠く離れた所に住み、そこに伝えられる僅かな材料から、 ることが出来るかも知れない。半蔵は中仙道馬籠の宿という中央 せたという記憶がある。それは「夜明け前」の主人公半蔵に譬え とは無かったと思う。しかし、じっくり両者の論拠を聞いておら て行われたものである。 論が盛んに戦わされた。 L れた数少ない言葉は周囲の人々の心を打つというものであった。 たのであろう、最後に発せられる一言は、千金の重みを感じさ ていった時期である。 昭和十二年といえば、 河原さんは、こうした論戦に深く関るこ 論戦はよく図書館前の芝生に車座になっ 学生の間では、 日本は急速に軍国主義・全体主義へ傾斜 却って自由等について議 H

たと思う。は、河原さんの学問の土台であり、その後の成長の基になっていは、河原さんの学問の土台であり、その後の成長の基になっていいがの穴から物事を優れた洞察力と平衡感覚をもって見詰める態度

思う。 態度で貫かれている。河原史学の真髄というべきものであろうと 以後の河原さんの論稿は、この史料を飽迄ジーツと見詰めてゆく れは少ない
上料を見据え
史料批判の
結果の精緻な
結論であった。 すなわち嶺南の蛮夷でなければならぬとされたものであるが、そ それまで劉氏はアラブ人であろうとされていたのを、 く。昭和二十三年東洋学報に発表された「南漢劉氏祖先考」は てこれを分析し、理路整然、一歩一歩正確な 史実に 接近してゆ を扱ったものであるが、スケールの大きさ、 が、神宗の時代に経略が行われて 中国 化 していった。覊縻政 心にして広西省およびそれらと接する地方に居住した蛮族である 卒業論文は、 渓峒蛮の研究であった。 宋代渓峒蛮は湖 些細な史料を見据え 劉氏は番鬼 南省 を中

たものである。 でものである。 でものである。 であるとを聞いて安堵し 対別原さんが法政大学に元気で勤めておられることを聞いて安堵し 大人の消息を殆んど不明にしてしまった。二十六年上京した私は 戦、そして太平洋戦争、敗戦、敗戦後の未曽有の混乱は、知人・ 戦、そして太平洋戦争、敗戦、敗戦後の未曽有の混乱は、知人・ は九州に赴任した。地理的に遠隔でもあり、泥沼化した大陸での は九州に赴任した。地理的に遠隔でもあり、泥沼化した大陸での は九州に対任した。地理的に遠隔でもあり、泥沼化した大陸での

、教授室での雑談は尽きることが無かった。現在興味を持って温顔に接することが出来るようになった。講義前後の僅かな時四十二年、法政に出講するようになって、再び親しく河原さん

턥

0

泂

性格その歴史的意義、また宋代四川の佃戸に対する見解に相違がが迸り、却って若返られたのではないかとさえ感じさせられた。が迸り、却って若返られたのではないかとさえ感じさせられた。にのいて、宋史劉師道伝に見える「川峡豪民多旁戸」をどのようについて、宋史劉師道伝に見える「川峡豪民多旁戸」をどのようにのかということである。この短い一文は、解釈の仕方で、乱のなが迸り、却って若返られたのではないかとさえ感じさせられた。
就近り、却って若返られたのではないかとさえ感じさせられた。
就近り、却って若返られたの河原さんの話は、秘められた情熱調べておられる問題についての河原さんの話は、秘められた情熱

若い人は、今日は銀座、明日は新宿、次は渋谷、次は浅草というという流行歌に『広い東京恋ゆえ狭い』というのがあるが、今の難いことである。雑談の中にこんな話があった。『東京行進曲』願いするのだから粗末には扱えないと言われたことがあった。有願いするのだから和末には扱えないと言われたことがあった。有私の講義は河原さんと同じ時間であったが、先に講義を終わら私の講義は河原さんと同じ時間であったが、先に講義を終わら

と思う。と思って聞いていたらさにあらず。こうした解釈が生まであろうと思って聞いていたのさにあるずにの変化と、こうした環境の中で成長する若い人というもれる環境の変化と、こうした環境の中で成長する若い人というもれる環境の変化と、こうした環境の中で成長する若い人というもたたかに見詰める学問的態度が、教育面に昇華したものであろうと思う。

雑談が聞けなくなるのが何よりも淋しい。長く指導して頂けるよう御願いする次第である。私にとってあの長く指導して頂けるよう御願いする次第である。私にとってあので致し方ない。今後の河原さんの御健康と御活躍を祈り、後輩をスであろう。しかし、これは定年制という一つの約束によるもの

見据えられるのである。これは、「李順の乱に参加した旁戸につ

いて」として法政大学文学部紀要第二十四号に収められている。

河原さんは情熱を深く蔵した永遠の青年である。

けであるが、この話は河原さんの情熱・迫力を感じないわけには

生ずる重要な一文である。河原さんは、後者の見解をとられるわ

いま、

河原さんを送ることは、

法政大学にとって一つ

0

マイナ

いかなかった。短い史料と言えども、愛情を持って十分にこれを

河原先生と史学科

岡 昭 男

安

本史の私が最も古くなってしまう。

本史の私が最も古くなってしまう。

本史の私が最も古くなってしまう。

東洋史の河原先生が退かれると、残る専任者のうちでは、日外国史では八年前に、西洋史の竹内先生が名誉教授になられていの史学科にとって、ひとつの時期を画するもののように思える。
東洋史の河原先生が五十七年度をもって去られることは、法政

まで担当され、通信教育では毎年夏期の教室授業のほか、春秋各先生は東洋史の概説・演習・特講はもとより、教職課程を最後

釈するのだそうのである。私はその結論は「今の若い者は……」

トの場所が無くなってしまう。東京は狭いなあという意味に解

工合にデートを重ねるから、さしも広い東京も、またたく間にデ

七六

河

原正博先生を送る

的確であることを、あとあと嚙みしめるのが常であった。別なるいは一般の問題に対して、言葉すくなに洩らされる判断がいう先生によって大学の教育は支えられているのであり、学生たいう先生によって大学の教育は支えられているのである。また学の念をいつまでも心に留めており、私もその一人である。また学の念をいつまでも心に留めており、私もその一人である。また学の念をいつまでも心に留めており、私もその一人である。また学の念をいつまでも心に留めており、私もその一人である。また学の念をいつまでも心に留めており、私もその一人である。また学の念をいつまでもいであった。授業をこれほどまでにわたって期および冬期に隔年講義された。授業をこれほどまでにわたって

学科の将来を見守って下さることをお願い申しあげたい。生が今後もお元気で御研究をお続けになられるようお祈りし、史する者よりも、用心している人の方が長生きするものである。先お身体を大事にされながら休まずお勤めになった。強健さを過信お子を大事にされながら休まずお勤めになった。強健さを過信二十数年も以前になるが、健康を取り戻されてからの先生は、

河原先生を送る

たのである。

村上直

ある。その間、先生が研究に教育に、史学科の柱となっていただ史をそのまま歩まれ、大学の発展のためにご尽力なされたわけでたのは昭和二十三年四月であるから、まさに戦後の法政大学の歴たのは昭和二十三年四月であるから、まさに戦後の法政大学の歴文学部史学科の河原正博先生が、本年三月三十一日をもって定文学部史学科の河原正博先生が、本年三月三十一日をもって定

支えていただいたことを今でも忘れることはできない。

大生とご一緒に研究室でお話するようになったのは、丁度、ち、先生とご一緒に研究室でお話するようになったのは、丁度、かった時期であり、気持のうえでもきわめて不安定なときであった。しかも、岩生先生がその年の三月に定年で退任され、丸山先かった時期であり、気持のうえでもきわめて不安定なときであった。しかも、岩生先生がその年の三月に定年で退任され、丸山先かった時期であり、気持のうえでもきわめて不安定なときであった。しかも、岩生先生がその年の三月に定年で退任され、丸山先がった時期に竹内・河原両先生が、しっかりと苦難の史学科を生が五月に亡くなられるという、史学科が最もになった。この時期に竹内・河原両先生が、しっかりと苦難の史学科を生が五月に亡くなられるという。

適切なご意見は、私たちにとって、いつも貴重な指針になっていっておられる方である。ときに言葉数は少ないが、ご指摘なさるでいて学者として、しっかりとしたお考えをもち、強い信念をも河原先生は、どちらかというと寡黙な方である。しかし、それ

法政史学 第三十五号

らないのである。なくなってしまった。私にはこのことが何となく残念に思えてななくなってしまった。私にはこのことが何となく残念に思えてなてしまったため、先生とはかつてのようにご一緒に帰ることが少私の二人だけになったが、最近は私の帰りが何かと不定時になっ

先生と私は、専門が違うため、研究の上では直接、ご指導いた先生と私は、専門が違うため、研究の上では直接、ご指導いた。しかし、昭和五十七年度の秋の法政大学史だくことはなかった。しかし、昭和五十七年度の秋の法政大学史

である。 だいである。 だいである。 なれたちをいつまでもお導き下さるようにお願いするしからも、ご健康に留意され、なるべく史学科の行事にも参加して引き続き、一日、大学院にはご出講願うこととなっている。これ引き続き、一日、大学院にはご出講願うこととなっている。これの諸君の場合も同じであろう。先生は専任教授を退任なされてもの諸君の場合も同じであろう。先生は専任教授を退任なされてもの諸君の場合も同じであろう。先生は専任教育部の史残念でたまらないようである。たまたま、地方で通信教育部の史残念でたまらないようである。

い出

思

笹 目 善一郎

この度、

先生が御退職なさると伺いました。誠に淋しいことで

「南漢劉氏って何だ?」

国は皆目わかりません。 にばかりの我々には、五代十国の一つ、広州に都した南漠なんてやきでした。高等師範部地歴科を三月に卒業して、史学科に入っやきでした。高等師範部地歴科を三月に卒業して、史学科に入っい

で、あの嘉悦学園の教室もまだ明るく、夜学生には大助かりでしれていましたから、夜学の一時間目は今の午後四時半に始まるのその頃は前年(昭和二十三年) 四月から 「夏時間」 が施行さて、あの混沌錯雑たる十国の推移を手ほどきして頂いたのです。 ガリ版刷ですが、一応のり付けされた十数ページの資料を頂い

述は、通教生は勿論それ以上に私が助かっております。 ージの中に現代史までも含まれ、先生独特の簡にして要を得た叙には待望の通教テキスト「東洋史概説」が刊行され、二四○余ペには待望の通教テキスト「東洋史概説」が刊行され、二四○余ペには待望の通教テキスト「東洋史概説を先生が御担当なさることになり、私大学通信教育の東洋史概説を先生が御担当なさることになり、私

先生に手とり足とりされて史学の道に踏み込んだのであります。あります。我々古い卒業生にとっては、「竹内・丸山・河原」三

七八八

往時に戻って改めて御教示下さる時間を、どうか先生、とってお 今よりは少しお閑な時もおありでしょう。不肖初老の昔の学生に えました。先生が法政を去られることは誠に淋しいことですが、 のに、そのうち先生にお会いして……と言っているうち今日を迎 す。三十年来、東洋史についてお尋ねすることが多々ありました になりません。そしてその時になって慌てるのです。私もそうで 5 この三先生と共にあるのです。丸山先生は夙にみまかり、 いて下さい。 全て法政から去られることになります。時の流れは留りませんか 生は八年前最終講をなさり、今、河原先生をお送りしようとして 幾度となく停電に妨げられた終戦後まだ日の浅い夜学の思い出は います。同学の日君が言うように、史学科の夜学時代の先生方が いつかはこうなると判っていても、その時にならないと実感 竹内先

先生の末永い御健勝をお祈りしつつ擱筆いたします。

(新制1回卒)

った記憶をもつ。

厳 しかった演習

名臣言行録(五朝名臣言行録)」 史学科四年生の時のノートに、 と題する一冊がある。 東洋史演習・河原正博教授 (昭和三十四年度・八六五番教 宋

星

野

良

作

演 一習は河原先生の用意された白文のプリントで進められた。 漢

河

原

正博先生を送る

ていった。先生と二人きりの演習が何度かあったように思う。 の講義のことを想う時、まず脳裏に浮ぶ。受講生もまばらにな 文の素養の乏しかった私には全く厳しい演習であった。河原先生

ŀ

文)に、「歳余にして成った本書の内容は、全部同君 書、奥書に、先生は「昭和十五年東京帝国大学文学部東洋史学科 ―星野注)苦心の訳業である」と見えるのに感動し、 を手に入れ、本書によって予習ができたからである。なお当時本 博訳註『宋名臣言行録(上)』(岩波文庫**、** どれほどたってからであろうか、私は神田で和田清校閱・ は裏がある。誰に教わったか忘れてしまったが、 いただけたのであろうが、私が何とかこの演習を凌げたのには実 作成の指示が記されているから、 前記ノートの最後、三十五年一月二十三日の頁に最終レポー 昭和十八年三月付で記された和田清先生の校閲の辞 何とか一年間を過ごし、単位 昭和十九年十一月刊) 演習が始まって 自分に鞭打 (河原先生 河原正

によって当時作成したものはいまでも役立っている だのは東洋史概説の時間だったと思う。また先生の「干支算出表 に美しい板書をされる。「隋」と「随」の違いをはっきりと学ん の作り方」(『法政大学史学科だより』十五、昭和三十三年七月) 先生は、その学風を偲ばせる肩に力の入らない正確で枯れた実

感謝申し上げるとともに、ご健勝とますますのご発展をお祈りす 進んだが、河原先生のご指導は四半世紀後のいまに及ぶ。 私は故丸山忠綱先生のご指導をうけ、日本古代史研究への道 改めて

七九

る次第である。

河原正博先生

井千鶴

白

中に居りました。
中に居りました。
中に居りました。
宇皇運動は、下降線をたどりつつあったとはい
昭和四十九年、学生運動は、下降線をたどりつつあったとはい
昭和四十九年、学生運動は、下降線をたどりつつあったとはい
昭和四十九年、学生運動は、下降線をたどりつつあったとはい
田和四十九年、学生運動は、下降線をたどりつつあったとはい

卒業後五年目、本年夏、東洋史ゼミの昭和五十二年度、

五十三

見失いがちな時でした。 河原先生にお会いしたのは、そんな騒々しい環境の中で自分を

小じんまりとした東洋史ゼミは、頁を繰る音さえ響き、少し徴い資料に落ち付きを見い出せる静かな場所、 厳格な 時間 でし臭い資料に落ち付きを見い出せる静かな 場所、 厳格な 時間 でした。史記をテキストに用いた授業で、先生は、文章の一節ごとにた。史記をテキストに用いた授業で、先生は、文章の一節ごとにかられた。

て下さったように思えます。そして、また、私達が河原先生に傾て、深い理解をもって、仏の手の中の孫悟空を見守るように導いわれがちな私達に対し、手とり足とりでなく、一定の距離を隔て先生は、熱し易く、全てに簡単に絶望し、また、焦燥感におそ

あるのです。倒するのは、授業を離れても、その優しさを示して下さった所に

八〇

先生は、御酒はたしなまれなかったのですが、学生のコンパにた生は、御酒はたしなまれなかったのですが、学生のコンパにたいました。特に、追い出しコンパの際に唄って下さった「月下さいました。特に、追い出しコンパの際に唄って下さった「月下さいました。特に、追い出しコンパの際に唄って下さった「月下さいません。また、先生は、甘い物がお好きで、女子学生のみれられません。また、先生は、甘い物がお好きで、女子学生のみれられません。また、先生は、御酒はたしなまれなかったのですが、学生のコンパに先生は、御酒はたしなまれなかったのですが、学生のコンパに

燥感や自暴自棄の虜になっていたことを改めて恥かしく思いました感感や自暴自棄の虜になっていたことを改めて恥かしないことで、以前にも増しさについて熱心に説かれました。今ほんの少し 成長した 私達に とって無っぽくお話になられるお姿に小さなゼミ教室での緊張気味のて熱っぽくお話になられるお姿に小さなゼミ教室での緊張気味ので熱っぽくお話になられるお姿に小さなどに先生がおっしゃられた中庸ということをいくらか理解できるようになっていました。授業が懐しく甦えりました。今ほんの少し 成長した 私達に とって無っぱくお話になられるお姿に小さなどと 教室での緊張気味の生は、大変お元気で、当時と少しもお変わりなく、以前にも増し生は、大変お元気で、当時と少しもお変わりなく、以前にも増し生に、大変お元気で、当時と少しもお変わりなく、以前にも増し生に、大変をはいる。

河原正博先生を送る

に残念に淋しく思いました。お人柄に、もっと沢山の後輩達がふれてほしかったのにと、非常お人柄に、もっと沢山の後輩達がふれてほしかったのにと、非常との皮、先生の退任されるととを伺い、先生の素晴しい授業と

うです。

大変幸せに思っております。私達は、先生から十分すぎる母のご指導を頂きましたことを、

(呂口エー三年三十)とき、毎年4年を行っ、河原先生、永い間ありがとうございました。

(昭和五十三年三月卒業、海洋科学技術センター勤務)

河原正博教授の最終講義

史学科主催の最終講義と懇親会が開かれた。
会館(東京都新宿区市ヶ谷船河原町)で午後三時から文学部及びの先生の学恩に感謝するため、二月五日(土)、午後三時、家の光ー目をもって定年退任されることになった。ついては、これまで一日をもって定年退任されることになった。ついては、これまで一日をもって定年退任されることになった。

て、河原ゼミ(東洋史)を代表して周雪清さん、ゼミ卒業生を代の一端を拝聴することができ、深く感銘を受けた。 講義 を 終っの一端を拝聴することができ、深く感銘を受けた。 講義 を 終っの研究者としてのご経歴、ご業績についての紹介があり、引き続いて河原先生の「少数民族の漢化過程」と題する最終講義があっいて河原先生の「少数民族の漢化過程」と題する最終講義があっいて河原先生は、加来彰俊文学部長の挨拶についで倉持俊一教授から河原先生は、加来彰俊文学部長の挨拶について倉持俊一教授から河原先生は、加来彰俊文学部長の挨拶について倉持俊一教授から河原先生は、加来彰俊文学部長の民族により始まり、第一部の 最 終 講義当日は安岡昭男教授の司会により始まり、第一部の 最 終 講義

懇親会は、中野栄夫助教授の司会で、まず史学科を代表して村の辞で終了した。ついで記念撮影、第二部の懇親会へ移った。表して白井千鶴さんから花束贈呈が行われ、伊藤玄三教授の閉会

思親会は、中野栄夫助教授の司会で、まず史学科を代表して村 を進められ、終りに河原先生の謝辞、倉持俊一教授の閉会の辞に が、岩生成一・元主任教授(現・学士院会員)の音 が、持雄蔵の両氏、芥川竜男・大森実両教授、地理学科の渡辺 が・丹治健蔵の両氏、芥川竜男・大森実両教授、地理学科の渡辺 が・丹治健蔵の両氏、芥川竜男・大森実両教授、地理学科の渡辺 の大きにより、それぞれの立場から河原先生の功 が、地理学科の渡辺 のいで法政大学の校歌を合唱して六時半に散会した。参加者一二 ついで法政大学の校歌を合唱して六時半に散会した。参加者一二 ついで法政大学の校歌を合唱して六時半に散会した。参加者一二 ついで法政大学の校歌を合唱して六時半に散会した。参加者一二 ついで法政大学の校歌を合唱して六時半に散会した。参加者一二 ついで法政大学の校歌を合唱して六時半に散会した。参加者一二 ついまず史学科を代表して村

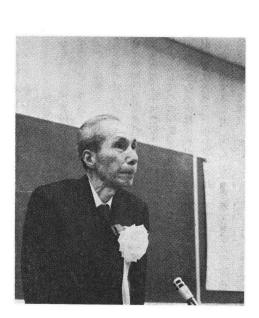
最終講義要旨

少数民族の漢化過程

原正博

河

って当然のことではあるがその地の非漢族――古くは華夷思想ににその開発を発展させていったのであって、この郡県の設置に伴その際、漢民族は郡県を設置して、その進出地域を確保し、更流域地帯への進出発展は中国史の大きな流れであった。 黄河の中流域すなわち中原の地に興った漢民族の、南方揚子江



の地帯 ある。 強大な組 の非漢族の各グループは漢民族による郡県制という巨大な 「蛮」と呼ばれたー かし何といっても分散 織力の下では、 と交渉し、 大きな影響を受けざるを得なかっ 的、 個別的で、 関連をもつに至ったので 小社会群であるこ

をそれぞれその州 けではあるが、 ろでは、 たわけである 宋会要の蛮夷五や桂海 これらの酋長を通じて間接的な統治をおし進めようとして 非漢族の聚落に対して、 何 知事、 々州、 県知事に任じ、 何々県という名を授け、 虞衡志その他の宋代の史料に見えるとこ その大小にしたがって、 あるいは宋の寨の寨将と その各々の酋長 名前だ

> 申すまでもない。 れがいわゆる羈縻州県で、 にある郷村の官治補助機関として徴税、 知事と呼ばれてはいるが、 いる。 を行うこととしたわけである。 内部の利害、 を同じくし、 長に相等する下級な者と考えられていたのである。 体、 情偽によく通じ、 酋長とその部民の関係を見るに、彼等は互に言語嗜 朝夕相接し、 中国州県の防衛の役目を負担させたもので、 実際、 中 婚姻相通じているので、 国内地の州県と同格ではないことは なお酋長はこのように州知事、 また部民から信服され 彼等は中国内地でいうと県の 治安の役にあ た た そ か 里 下 県

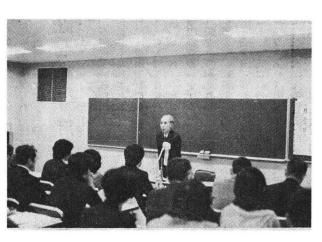
なる。 漢化 如く描写している。 して居住している黎人が如何に漢化しているかを目の前に見るが 変服入州県墟市。 漢人(王民、 Th 結隊而帰。 程度の淡きもの、さらに外廓にはほとんど漢化の及ばな 一の州、 嶺外代答二巻、海外黎蛮に、 わゆる「熟蛮」 いわゆる「生蛮」— 県及び寨を中心とした図解的に同心円: 省民) 始知其為黎也」とあって、 人莫弁焉。 が居り、 更に次の地帯にはそれに比較すると が層をなして配列されてい 日将晚。 次の地帯に漢化の 「黎人半能漢語。 或吹牛角為声。 州県の近郊に聚落をな 程 度の を画 十百為群。 けば中 則紛紛聚 たことと 濃きも 0 i

宋朝にかけての中国社会の変革の時期に起きているので、 きな動揺をあたえたことは勿論であるが、 さて宋の初め四川の地で起きた李順の乱が宋朝の 特にこの 乱が唐 四川 支配に 末か 6

河原正博先生を送る

関連してくることとなるのである。個戸問題の解明、すなわち宋代佃戸の身分的隷属性の問題と深く但戸問題の解明、すなわち宋代佃戸の身分的隷属性の問題と深くした旁戸の、豪氏への隷属関係が問題となる。この際、この乱に参加の性格あるいは歴史的意義が問題となる。この際、この乱に参加

月丙寅の条(『宋会要』刑法禁約、至道二年八月二十八日の条もほ一体、問題の旁戸に関する史料はただ太宗実録巻、至道二年八



の酋長が任ぜられていることはすでに述べた如くである。 く旁寨の壮丁の小集団の指揮官の意であろう。 と共に、旁頭の名が見えているのを知った。この旁頭も、 四百二十二人」とあって、義軍の指揮官として、砦将、 指揮使、 Ŧ, ではなかったろうかとの考えを述べたが、その後、 の)、その部民、すなわち宋の羈縻下にある「蛮夷」すなわち熟恵 旁寨下の戸で、酋長 は「李順の乱に参加した旁戸について」の論考を発表し、旁戸は あったことにも特に関心をもつべきであろうと考える。さきに私 おこった四川の地、特に陜路や夔州路の地が「蛮漢雑居」の地 も旁戸につき考察する場合に注意すべきことであるが、この乱 ぼこれと同文)と宋史

| 劉師道伝だけで、史料がすくないこと 夢州路義軍土丁、壮丁の条に、 巡検将、砦将、科理、旁頭、 (宋の寨将あるいは刺史に任ぜられているも 「思州、 把截、 部轄将、 洪杜・彭水県有義軍 砦(寨)将に「蛮」 宋史卷 并壮丁総千 把截など おそら 兵志